

4. 海外調査

～アメリカ合衆国ノースカロライナ州の自閉症協会（ASNC）のメンター， IEP学習会について

下記の日程で，海外調査を行った。ここでは本研究の目的のうち，自閉症児童生徒を対象にした地域生活支援プログラムに取り組み，効果を上げている機関（海外を含む）の例として，アメリカ合衆国ノースカロライナ州の自閉症協会（ASNC）におけるメンター， IEP学習会について取り上げる。

(1) 調査機関＜平成16年2月10日から18日＞

一日目

- 8:30から10:00 援助付き就労について講義。援助付き雇用TEACCH A&Rについてのレクチャー
- 10:00から13:00 S A S（親の会）の援助付き就労ジョブサイト訪問
- 15:30から16:30 チャペルヒル・TEACCHセンターの所長，リー・マーカス博士とIEPについて協議

二日目

- 10:00から11:30 ノースカロライナ州の自閉症協会（ASNK）の，家族のアドボカシーをサポートシステムとノースカロライナの社会資源について協議
- 13:00から15:00 TEACCHチャペルヒルセンター・プリスクール見学

三日目

- 9:00から10:00 キャリイにあるアダムス小学校プリスクール訪問
- 11:00から11:45 東チャペルヒル高校訪問，自閉症の教室を見学
- 11:45から12:15 担任のジャネット・ホートンにインタビュー
- 14:30から15:30 クリエイティブ・リビングとツアーセンターのキム・サンバースと会う。

四日目

- 9:30から11:00 TEACCHプレスクール（2歳児）を見学
- 11:00から11:30 TEACCHプレスクールの教師であるベス・レイノルズにインタビュー
- 13:30から15:00 カロライナ生活学習センター（CLLC）をプレゼンテーションとツアー
- 16:00から16:30 TEACCHプログラムディレクターのDrメジホフと会う。

(2) 自閉症協会（ASNK）

ノースカロライナ州の自閉症協会のための，家族のアドボカシーをサポートシステムとノースカロライナの社会資源について調査したことを以下に報告する。



（ASNC；アズニック）の入居しているビル

訪問先は、Autism Society of North Carolina (ASNC ; アズニック) である。

対応してくれた自閉症協会 (ASNC ; アズニック) のリンダ・グリフィンさんは、御自身が20歳の子供をもつ親である。息子さんはNC stateUの生涯学習プログラムで大学に通う予定だという。彼女がASNCの説明や活動を教えてくれた。

ASNCは、全州規模の団体で、各地に支部がある。主な事業は以下のとおり。

- ・ I E Pに関するプロセスについてのワークショップ
- ・ 診断サービス
- ・ 援助付き就労者等へのコミュニティサービス
- ・ サマーキャンプ (一ヶ月間前後開催している)
 - * サマーキャンプは、子どもから大人まで抽選で決めているほどの人気。このキャンプは一对一で支援者が付いてくれてすごく良いらしい。レクリエーションセラピストなどが専門的にいろいろなことをしてくれる。
- ・ 会報誌の発行
- ・ クリエイティブ・リビングなどの運営 (日本でいうと通所授産施設に近い)
- ・ メンタープログラム
 - * 経験を積んだ親が、診断直後の親などを支援するシステム。

事前に準備しておいた以下の質問を行った。

Q 1 ; 保護者が診断を受けたい場合の、ASNCの支援について

A 1 ; TEACCHがCDSIという組織が診断する。その後ASNCに相談が来て、資源を紹介する。あまり、訪問したくないようだったら、近くのレストランで話をすることもある。

Q 2 ; 地域差は州内でもありますか？

A 2 ; 人口が少ないと予算が少ないのでどうしても差が出てしまう。ただ他の州に比べて、自閉症支援は進んでいると思う。

Q 3 ; 予算的な問題は？

A 3 ; ASNCはプライベートの組織で、寄付金等でまかなわれている。一方、TEACCHは州の予算。

Q 4 : TEACCHとは、立ち上げの時から一緒だと聞いているが現在は？

A 4 : TEACCHとのコネクションが最も強いが、現在は選択の時代であり、ABA (応用行動分析) などを利用する人もいる。TEACCHと組んでいるのではなく、講師等で協力してもらったかたちを取っている。TEACCHとは親密だが、予算の出所が違うので別のところでやっている。

例えばクリエイティブ・リビング (後述) は、TEACCHからの働きかけではなく、親の会が独自で作った。

ASNCは、議員に働きかけるなどして、全米自閉症協会よりも大きな組織である。

Q 5 : TEACCHを学校教育へ強く介入して欲しいなどの要求をするのか？

A 5 ; フレンドリーシップとリレイションシップ。TEACCHメソッドを学校へ！というような活動は特にしていない。構造化された指導やABAなど、選ぶのは困難。オンリーTEACCHだとは言っていない。

リンダ女史としては、TEACCHはワンダフルだと思っているが、強く希望すると駄目だ。

大切なのは、TEACCHに創造してもらうのではなくて、選択すること。

Q 6 ; 学校と先生との対立はNC州でもあるのですか？

A 6 ; この対立は経なければならぬことである。

例えば、メンターとして、寄り添いながらそれを解決するなどしている。

Q 7 ; その対立を何かで解決していますか？

A 7 ; 例えばIEPミーティングのワークショップなど、できる限り両親に、リンダ女史の経験を生かして伝えている。その際、親がプロセスに参加することが大切であり、学校と家庭とのコミュニケーションを構築していくのが鍵になる。親は親の立場があつてそこに参加するのが大切。IEPにどのようにニーズを反映させるかを強調している。

(3) まとめ

ノースカロライナ州は、自閉症支援において世界で最も有名なTEACCHがあるが、そこにある自閉症協会(ASNC)が、これほどまで機能していることは予想以上だった。

特に、「IEPに関するプロセスについて」のワークショップを、当事者団体であるASNCが主催していることは素晴らしい仕組みである。当事者が、専門家や教師などを招いて、IEPに向けた対策を練ることは、日本でも行われるべき事業だろう。また、主要な事業の一つに「メンタープログラム(経験を積んだ親が、診断直後の親などを支援するシステム)」がある。診断直後の保護者の心理的圧迫は、様々な調査からも分かっており、それを解消、または解決するための方策を親の会が主催して取り組んでいることは、注目すべきである。